

野鳥のいる幸せ～コモンズを楽しむ～

17期 小島 敬

Key words

相生山緑地、トラツグミ、オオルリ、ルリビタキ、コゲラ、ヒレンジャク、混群、コモンズ

1. 初めてのPWで舢倉島へ行く

今から50年前の1972年5月連休、ワングルの新入生歓迎・潮風PW〈PL松林さん(15期)〉で、能登半島沖の舢倉島へ行った。上級生6名、新入生13名、計19名の大所帯だった。5月5日金沢は朝から雨。国鉄七尾線の終点輪島駅から歩いて30分の袖ヶ浜キャンプ場で設営。5月6日5時半、起床。テントの中で朝飯。そのあと、輪島から舢倉島への定期船に乗った。港から出ると俄然揺れ始めて、みんな船酔いした。舢倉島までの2時間半はあまりにも長かった。舢倉島では灯台に登ったり海岸で遊んだりした。夕方、袖ヶ浜のテニ場に戻った。夜はファイアストーム。浜辺に流木を集め、火が消えるまで歌った。夜空が素晴らしく美しかった。5月7日、快晴。海は青く澄んでいた。波打ち際で鯖が手掴みで獲れた。

海辺でキャンプをしたことも船で外洋の離島へ渡ったこともなかったので、すべてが新鮮だった。何よりもワングルが海や島へ行くという自由な発想に驚いた。潮風PWに参加したからこそ、その後の部活動も続けられたのかもしれない。

この舢倉島が日本有数の渡り鳥の中継地だということは、当時、知る由もなかった。

2. トラツグミ(ヌエ)とオオルリ

入部して最初の、夏合宿本番前の白山準合宿、南龍散策で先輩から高山植物の名前を覚えてもらう機会があった。先輩の中にはタカネシランソウ(高嶺紫蘭草?)などといい加減な説明で1年生を煙に巻く人もいたが、学究肌の上馬さん(15期)は誠実に丁寧に教えてくださった。1972年に発行された部誌Bergheim 13号“高三郎特集”に、上馬さんが高三郎・倉谷周辺の動植物について寄稿していた。印象に残ったのは、トラツグミとオオルリだった。「ベルクハイムに泊まると夜に聞こえる声の正体はトラツグミ(ヌエ)という鳥」、「オオルリは姿も声も美しく一度見たら忘れられない鳥」だという。でも結局、それ以上の興味

がなかった僕は、倉谷で鳥を探すこともなく卒業し、金沢を離れた。

50年後、名古屋市内でトラツグミとオオルリを見ることができた。まさか自宅近くの相生山緑地で出会えるとは思ってもいなかったのだから、本当に吃驚した。コロナ禍での運動不足を解消する為にバード・ウォッチングを始めていなかったら、こんな幸せな巡り合わせはなかっただろう。

トラツグミ〈留鳥〉

相生山では、冬に2回観察できた。林床の落ち葉を掻き分けて虫を探していた。2回目には“トラダンス”というユーモラスなダンスも披露してくれた。頭と足の位置は変えず、胴体をゆるする仕草が可愛い。夜中に山を散歩するのは恐ろしいので、



【①トラツグミ(2022/3/10)】

ベルクハイムで慣れ親しんだあの哀し気なヒョー、ヒョーという啼き声はまだ聞いていない。トラツグミ(鶺鴒)は『古事記』や『万葉集』にも出てくるほど古い鳥らしい。

オオルリ〈夏鳥〉

ももとはは溪流沿いに棲む鳥だが、山地から山地へ渡るときに立ち寄ることがあり、沢や池など水辺のない相生山にも5月連休にやってくる。三鳴鳥〈オオルリ、ウグイス、コマドリ〉の一種で、美しい声が林に響き渡る。なかなか姿を見せてくれず、さえずりだけが林の中を移動していく。1回だけメタセコイアの枝に留まっているオオルリの撮影に成功(ピンボケ!)した。周りが青くておなが白く、まるで「痩せたドラエモン」のようだった。確かに一度見たら忘れられない鳥だ。同じ頃飛来するキビタキ〈夏鳥〉もきれいな声で鳴く。オオルリはフルート、キビタキはピッコロに例えられる。美しいさえずりを聞きながらの散策も楽しい。



【②オオルリ (2021/4/30)】

オオルリの独特の青は色素色ではなく、羽毛の微細な構造が作り出す構造色 (structural color) だ。ルリビタキ (留鳥) の青もそう。構造色はブラジルのハチドリやモルフォ蝶が有名だ。ハチドリの構造色は青だけではなく驚くほど多彩だ。深い森の中をモルフォ蝶が静かに舞うさまは蠱惑的で、普通の色素ではあの艶めきは出ないと思う。

3. 相生山の四季を歩く

名古屋市内東部丘陵地の南に位置する相生山緑地 (123.7ha。上野恩賜公園の2倍、金沢大学旧城内キャンパスの4倍強の面積)。緑地指定を受けて開発が制限されたおかげで広大な雑木林が残っているが、周囲に緑はほとんどない。航空写真で見る相生山は、夥しい数の兵隊 (大規模団地や住宅) に包囲された古代中国の城塞都市のようだ。台形をした緑地は、北の1/5が「オアシスの森」として散策路が整備されている。南の4/5では里山風景が見られる。東西に浅い谷が広がり畑や家が点在している。このあたりに下水道はなく、バキュームカーが定期的にやってくる。畑には常滑焼の壺が埋められている。肥溜めだ。小学校低学年の頃、相生山で友達と遊んでいて肥溜めに落ちたことがある。この洗礼のお陰で雑菌に強くなり、お世辞にも衛生的とは言えないワンゲルをどうにか卒業できたのだろう。

相生山には、北陸の山のような春の「山笑う」という風情はない。芽吹きが始まっても山が微笑むのは一瞬で、桜が終わったと思ったら、あっという間に葉が茂り初夏がやって来る。緑にグラデーションはなく、濃い緑一色となる。初夏はバード・ウォッチングには不向きだ。木々の葉で視界が全く効かない。天敵から身を隠せるこの時期に

小鳥たちが子育てするのは納得できるのだが、鳥見をする立場としてはなんとも具合が悪い。それに加えて、蒸し暑いし蚊も多い。せめてもの救いが、さえずりの美しいキビタキが7月まで鳴いていることくらいか。夏は蝉が喧しい。秋は秋で、近くの小学校で運動会の予行演習があり、大音量で流れる「天国と地獄」で鳥たちの気配がかき消されてしまう。幾度かの寒波が通り過ぎた年の暮れ、葉を落とした雑木林はすっかり冬の装いとなる。冬鳥が次々にやってくるので、バード・ウォッチングには最高の季節だ。コロナ禍で「二拠点生活」が取り上げられるようになったが、渡り鳥たちは大昔から「二拠点生活」をしている。

ルリビタキ (留鳥) は、冬の相生山で一番人気だ。スズメくらいの大きさだが、青と白に黄色のアクセントがあり林の中でも見つけやすい。青色と黄色は補色関係にあるので美しいのだろうか。



【③ルリビタキ (2022/3/3)】

相生山では老若男女がそれぞれの生活スタイルで散策している。季節や時間帯によっては3時間歩いてもほとんど人に会わないこともあるし、家族連れや保育園の子供たちで山が騒々しいこともある。500mmクラスの望遠を持ったバード・ウォッチャーは稀にしか来ない。そういう人に出会ったら、「いつ」「どこで」「どんな鳥」が見られるのかを必ず聞くようにしている。名古屋市の野鳥生息状況調査 (2020年) では54種類が観察されており、その内32種類を確認できた。緑地の中に溜池などの水辺があれば、もっとたくさんの野鳥が飛来するかもしれない。猛禽類もやって来る。冬晴れの日、はるか上空をノスリやハイタカが舞う。緑地に隣接するゴルフ練習場の高い鉄塔には、時々オオタカが留まって素人ゴルファーのスイングをチェックしている。

4. コゲラ (小型のキツツキ)

名古屋市内でコゲラ〈留鳥〉が見られるようになったのは1980年代だ。市内の平和公園(147ha)で初めて観察されたのが1985年。1987年には留鳥化し、その後市内各地で普通に観察されるようになった。都会の木々が成長してきた証だろう。

相生山でバード・ウォッチングを始めたきっかけはコゲラだ。他の俊敏な動きの鳥たちに比べ、そのドンくさが妙に親近感を覚えたからだ。

コゲラは手がかりが多く、素人にも探しやすい。1)木の幹の中にある虫を探すためのドラミング(木の幹を叩く音)、2)囚人服のような黒と白のまだら模様、3)木の幹を下から上に向かって虫を探す独特の動き、4)「ギィ」という特徴的な鳴声。



【④コゲラ (2020/12/20)】

相生山の面積は123.7ha。コゲラの縄張りは20haと言われているので、単純に縄張りが6あると仮定して、その縄張りを縫うように観察ルート(6km)を設定した。2020年10月からこの観察ルートを変えずにひたすら歩き続けてきた。1時間半で歩けるところ、倍の3時間かけて歩いている。五感を研ぎ澄まし鳥の気配を探る。動体視力と聴力は少し良くなったような気がする。天気予報では風速も注意するようになった。風が強いと葉擦れの音で鳥の気配が消えてしまうのだ。冬は落ち葉を踏みしめる自分の足音すら邪魔になる。

色々な野鳥がいることを知り、観察記録(鳥の種類、時間、場所など)をつけるようになった。

5. 日本野鳥の会入会

2021年2月、「日本野鳥の会」に入会した。入会したのに深い意味があるわけではない。カメラを構えてウロウロしていたら、不審者と思われることは間違いない。怪しまれた時のお守りが野鳥

の会の会員証だ。

野鳥の会入会の10日後、突然、ヒレンジャク(緋連雀)の群れが自宅の庭にやってきた。初めて見る鳥だった。あたりを睥睨するような鋭いまなざし。南方のジャングルにいたら似合いそうだが冬鳥だ。ヒレンジャクはアムール河下流域にだけ棲んでいる。毎年日本に渡るわけではないようだ。野鳥の会入会のお礼にわざわざウチまで来てくれたのだと勝手に思っている。



【⑤ヒレンジャク (2021/3/2)】

1934年に創立された「日本野鳥の会」初代会長、中西悟堂(1895-1984)は金沢市出身で、金沢ふるさと偉人館に顕彰されている。

野鳥はカメラ(望遠付のポケットサイズ)で撮り、帰宅してから図鑑で調べることにしている。名古屋市の生息状況調査表で当たりを付け、図鑑の中から探す。今ではスマホのカメラを野鳥に向けてと名前が表示されるアプリや鳴き声で検索できるアプリもある。アナログだけど図鑑で調べそこに自分なりの発見があつてこそ、面白いのだと思う。コロナ禍で、野鳥の会ではオンラインでの探鳥会や初心者向け講座が行われている。自宅に居ながらにして参加できるのはありがたい。

6. 混群

秋から冬にかけて数種類の小鳥たちが集団で林の中を移動することがあり、この群れを「混群」と呼ぶ。それぞれの鳥のセンサーが危険を察知して互いに知らせあうことで、天敵から身を守るといわれている。相生山では、留鳥のシジュウカラ、メジロ、ヤマガラ、コゲラなどが混群を作る。

混群のお陰でコゲラが探しやすい。

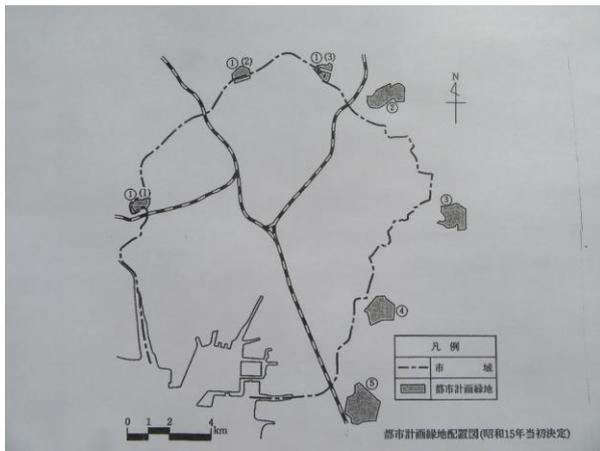
動物行動学者・鈴木俊貴さん(京大・白眉センター)の研究によって、シジュウカラは単語や文

法を持っていることが証明できたという。「ジャージャー」はへびのこと。シジュウカラが地上にいるへびを見つけて「ジャージャー」と鳴くと、混群の他の鳥たちも一斉に警戒して地面を確認することが分かった。なんとリスまでも！他の動物もシジュウカラ語が分かるのだ。へびを発見したシジュウカラが、「ピーツピー」（警戒しろ）＋「ヂヂヂ」（集まれ）の語順で鳴くと、仲間の小鳥たちが集まって来てへびを威嚇する。逆の語順では反応しないことも判明した。シジュウカラには文法能力があるのだという。2022年9月、名古屋で鈴木さんの講義を聴いた。分かりやすいお話だった。今後のさらなる研究成果が楽しみだ。

7. 防空緑地としての相生山

国の都市計画法の改正を受け、名古屋市では1940年、名古屋を環状に取り巻くように、5つの緑地（7箇所）が都市計画決定され、「防空防護、都市膨張の抑制、密住の防止、市民の心身の鍛錬」の一石四鳥の施設として整備されることになった。中心部に侵入してくる敵機を周縁部で迎え撃つためだ。しかし、緑地に高射砲陣地等の軍事施設が置かれることなく敗戦を迎えた。

（大阪では、服部緑地（126ha）や鶴見緑地（122ha）などが防空緑地に指定された）



【⑥防空緑地の地図（南東部④が相生山緑地）

『名古屋都市計画史』p. 173 図3-16】

名古屋市への空爆において、米軍は三菱などの軍需工場へは爆弾で、市街地へは焼夷弾で攻撃を行なった。中心部の人口密集地をゾーンⅠ、それを囲む地域をゾーンⅡとして目標を定め、1945年3月と5月に焼夷弾での大規模な無差別空爆を行ない、多くの一般市民を殺傷し民家を焼き払った。疎開等大量の避難民の発生により名古屋市の

人口は1年間で半減（134万人⇒60万人）した。仮に防衛関連施設が緑地に置かれていたら、真先に攻撃目標となって徹底的に破壊されていただろう。相生山のすぐ西にある僕の実家は爆撃で跡形もなくなっていたにちがいない。

戦後の高度経済成長期、東部丘陵地は切り崩されて団地や住宅地に生まれ変わり、大半の緑が消えた。戦前に指定された防空緑地は「密住の防止、市民の心身の鍛錬」には大いに役立っている。

8. コモンズを楽しむ

相生山緑地は現在「長期未整備公園緑地」と位置づけられている。民有地が多く、予算的制約から買収が進んでいないためだ。10年～20年単位の長いスパンで今後の整備計画も立てられている。樹林地については「借地対応」地域を設定し民有地を名古屋市が借り受け、「オアシスの森づくり事業」と名付けて雑木林の保全に取り組んでいる。市民グループが雑木林の植生管理や自然観察会などを行なっている。土地所有者、市民、行政が協力して管理する試みを進めているのだ。

これは、「共同管理している自然」という広義のコモンズ（Commons）ではないか。環境社会学のテキストに載っているコモンズは、「イギリスの領主の所有地に庶民がアクセスの権利（利用権/収益権）を認めさせたもの」とか「日本の入会権」とか、およそ僕には関係のない話だと思っていた。コモンズがこんな近くにあったことに気づけたのも、野鳥たちのお陰だ。

北欧諸国には万人権（everyman's rights）がある。他人に迷惑をかけず生態系を損なわないことを前提に、他人の所有する土地や山林に誰もが自由に立ち入り、自然を楽しみ、ベリー類やキノコなどを採取することができるという環境享受権だ。自然と共に暮らすことが当たり前で、人口密度の低い北欧ならではの権利なのだろう。

身近な自然が多く関係者の手で守られていることに感謝しながら、きょうもバード・ウォッチングに出かけることにしよう。